



Book Talk

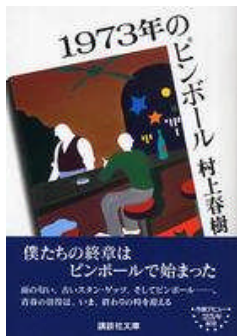
編集・発行 海南高校図書館
第20号 2014.02.24

本校では「〇月の新しい本」「おすすめ！BOOK」「読書への誘い」などが出され、多くの本が紹介されている。屋上屋を重ねることは承知のうえで、読書好きのひとりとしてブック・トークの原稿を引き受けることにした。それほど多くの本を読んでいるわけでもないが、思いつくままいくつかの本を紹介してみたい。

皆さんは村上春樹の作品を読んだことがありますか。昨年春に出版された『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』は三年ぶりの長編小説であり、世の注目を集めた。この他にも多くのベストセラーがあるのだが、ここでは七年前に発表された『走ることについて語るときに僕の語ること』をとりあげてみる。この本には村上さんが作家になった頃のことも書かれている。

1978年4月1日の午後一時半頃、神宮球場の外野席で応援していたヤクルトの若いアメリカ人選手がヒットを打ち、二塁に到達した。その瞬間「そうだ、小説を書いてみよう」と思い立ち、さっそく原稿用紙と万年筆を買い『風の歌を聴け』を書き終えた。この作品が翌年の群像新人賞を受賞し、村上さんは小説家デビューを遂げる。そしてジャズ喫茶を営みながら『1973年のピンボール』とつづく『羊をめぐる冒険』を上梓し、ほろ苦い青春三部作は完結する。

そののち専業作家となって生活しはじめたとき、体調維持のために始めたのが日々走ることであった。小説家にとって重要な資質は何か？村上さんによれば、まずは才能、その次には集中力と持続力である。才能は先天性の問題を含むが、集中力と持続力は努力によって向上させることができる。村上さんはいつも午前中の三、四時間、文章を書くことに意識を傾倒し、仕事をしている。また長編小説を書くためにはこの日々の集中を長期間つづける力が求められ、村上さんは毎日努力を続けている。そしてこの努力は、毎日ジョギングをつづけることによって筋肉を強化し、ランナーの体型を作っていくトレーニングと同種の作業なのである。



村上さんは長編小説や短編小説、エッセイ、旅行記や滞在記、海外作品の翻訳など多くの作品を書き、文章を書くことを本当に楽しんでいる。その一方でランニングをつづけ、ボストン・マラソンやサロマ湖100キロウルトラマラソンといった大会にも挑戦している。小説を書く方法の多くを、道路を毎朝走ることから学んできたといい、またタイムはどうであれ最後まで歩かなかったという。さらに走ることがなければ、これまでの作品も少なからず違ったものになっていた気がするとも述べている。本書『走ることについて語るときに僕の語ること』は、走ることを軸にして、作家としてまたひとりの人間としてどのように生きてきたのかを観照した、魅力的なメモワールである。

ところで海高生の皆さんはどんな本を読んでいるだろうか。子どもの頃の私は多くの男の子と同様に野球少年であったし、中学校ではバレーボール部の練習に終始していた。したがってそれほど熱心に読書していたわけではない。ただ中学一年のとき慕っていた国語の先生から月に一冊は本を読むようにいわれ、読書の大切さは何となく感じていた。その後少しずつ本を手にとるようになったと思う。

高校生になってから何かの拍子で友人たちと山登りを始め、山岳小説を読んだり山の写真集を見たりするようになった。最初に読んだのは新田次郎の『孤高の人』である。これは、昭和の初期ヒマラヤ征服の夢をえがき日本アルプスの山々を踏破し、吹雪の北鎌尾根に消息を断った、単独行の加藤文太郎の生涯を描く作品である。ほかにも『栄光の岸壁』『銀嶺の人』など多くの作品を楽しみ、『縦走路』によって信州八ヶ岳は私の憧れの山となっている。また、映画化された井上靖の名作『氷壁』も印象的な一冊である。

山の本と並行して、松本清張の推理小説もよく読んだ。『ゼロの焦点』『点と線』『眼の壁』『砂の器』などの代表作があり、社会や人間の暗



読書のたのしみ

部を描いた作品が多い。数年前に読んだ『球形の荒野』は、第二次世界大戦末期に日本を壊滅から救うため自らの国籍と生命を喪失したひとりの外交官の物語であり、家族への絶ちがたい情愛に胸を打たれる。また清張には歴史小説も多く、考古学に題材をとったものも面白い。学生時代にはコナン・ドイルやモーリス・ルブランなどの海外作品もよく読んだ。またブリストリーの『夜の来訪者』やダン・ブラウンの『ダ・ヴィンチ・コード』などは非常に印象に残っている。

国内作家では夏樹静子と東野圭吾がお気に入りとなって久しい。夏樹作品には社会問題をテーマにした推理小説が多く、綿密な取材にもとづくストーリー展開と叙情豊かな描写が魅力である。東野圭吾は数学や物理に見識をもつ理科系出身の作家であり、文章はわかりやすい。代表作『容疑者Xの献身』は2006年に直木賞を受賞している。完璧な論理をもとめる数学者の石神と鋭く人間を洞察し状況を冷静に判断していく物理学者の湯川。石神は隣人の母娘を救うために完全犯罪を企て、かつての親友である湯川がその謎に挑む。石神の孤独な恋と湯川の人に対する優しさがとても感動的であり、ページをめくる手がとまらなかった。

最後に、戦後日本を代表する思想家、作家である加藤周一の著作を紹介したい。1919年羊の年に生まれた加藤の回想録『羊の歌』『続羊の歌』である。父母の家族の系譜にはじまり、勉強に明け暮れた小学六年、父の書齋で読書に没入し夕暮れを眺めながら過ごした中学5年間、寄宿寮で生活し歌舞伎座にかよった第一高等学校時代など、自らの思索を中心にじつにあざやかに振りかえっている。

校友会雑誌の編集にかかわり文筆の世界に入り込むなかで、小説の神様といわれたY氏と論争する話は凄絶である。また、内科教室で日本軍の戦況について事実判断と価値判断を区別できなかった後輩の若い医師をたしなめるところも、迫力がある。南方の島へ送られた青年たちが殺されることを考え、戦争を呪い、戦争宣伝とそれを受け入れた社会への怒りが込められていたのである。正編は八月十五日の玉音放送で終わっている。焼け野原となった東京であっても嘘でかためた宮殿よりも美しい、と加藤はそのとき希望にあふれていた。

敗戦後の1951年秋、実際の西洋を自分の眼で見きわめるべく、加藤はフランス留学に旅立った。パリ大学の医学部にかよう一方、ある詩人の家に居を移してからさまざまな人に会い、パリの現代劇を観つくし、フランスの歴史（とくに中世）や文化、芸術に遭遇していく。また、旅したイタリアのベネツィアとフィレンツェではルーヴルを凌ぐルネサンス芸術に圧倒される。途中、フィレンツェで同じ道と同じ速さで歩く女性に出会い、次の日、時がたつのも忘れて二人でシエナの街を歩いた。二人はのちに結婚するのだが、ヴィーンに彼女を訪ねる「冬の旅」は恋愛小説のようであり、加藤の温かな人間味が感じられるシーンである。



西欧での体験をつづった続編ではほかに外から見た日本、人種問題、AA会議、60年安保闘争などについても書いている。専門的な内容の著作はもちろん難しいが、この『羊の歌』『続羊の歌』は四十歳頃までを顧みたま半生記であり、おおむね読むほど明瞭に理解され味わい深い。和漢洋の広い教養と知識、そして冷静で合理的な思考。加藤は膨大な量の読書をし、事実の確定をしたうえで多方面のことに關して文章を残している。

高校生の皆さんはこれからもいろいろな目的で本を読むことでしょう。テレビや映画を観るのは異なり、読書は能動的な心の作用であり、とくに小説を読むことはもう一つの別の人生を経験することだといわれています。面白そうだと思う本を手にとれば、心の中の世界を広げることができるのです。

(数学科 絵本浩和)